「忘れ得ぬ日々」

サンレモリハビリ病院長　**市丸道人**
（元原研内科教授）

最後に、私のお話をいたしたいと思います。今日、被爆後60年経ちまして、皆様の前であの日のことをお話できるということは、ほんとに生き甲斐があったというふうな感じで感激しております。

まず最初に、お話したいことは、実はこの間の金曜日に、ご存知のとおり『アンゼラスの鐘』の完成祝賀会がございました。あの映画とても良くできておりますし、非常に感動的だと思います。実は、ここに『忘れ得ぬ日々』と題を書いておりますように、私が、あの原爆の日以後、何日間か過ごしまして、味わったこと、それをあの映画を見ることによって、忘れたくても忘れられないものを、さらにこの押し付けられたような感じがいたしまして、非常に胸苦しいような感じがいたしました。そういう言い方は悪いのかもしれませんけれども、言い方を換えれば、それほど非常に真に迫るというか、人に感動を呼び起こせる、優れた映画だと思います。したがって、言いたいことは、原爆を経験しなかった人、できるだけ多くの人に、アメリカの人も含めて、見てもらいたいなというふうに思ったわけです。

それじゃあ、私はなぜ、その時におったかということをお話いたしたいと思います。当時の医大1年生は、名簿によりますと原爆で74人死亡したとあります。その74人は、その日講義に出席しておりました全員でございます。私は、1年生でございまして、こうして生きてお話できているということはなぜかと、このことを大学の教授時代に学生に講義いたしますと、さぼっとったのではないか、というふうなことで笑われます。けれども実は、片淵町に下宿しておりまして、その日も学校に大学へ行くべく下宿を出まして、電車道まで来たんでございますが、電車道に来た時に、満員の電車が目の前を通り過ぎて行きました。その次の電車に乗ろうと思って、待っておりました。ところが、いつまで経っても来ないので、人に聞いてみたら「ちょうど上のほうで、事故があってるから、しばらく来んよ」という話を聞いて。ちょうどたまたま、私、佐世保の中学ですけれども、佐世保中学で同級でございました牟田先生と一緒になりました。で、「今日はもう歩いてまで行くことは止めよう」と言って、大学に行くことを止めたわけです。

そうして私の下宿で牟田君としゃべっておるときに、11時2分、飛行機の爆音が聞こえて、一瞬黄色く光が走ったと思うと、猛烈な爆風が通り抜けまして、室内のガラスは粉微塵、天井に大きな穴が開きました。それが原子爆弾の、長崎に落ちた瞬間でございました。ということで、私は、大学に行くことをしなかったために、中心地より2.8キロのところで被爆いたしました。そこの2.8キロでは、かなりの爆風と熱線もまいりましたけれども、幸いなことに放射能が随分減っとったので、その点は助かったわけでございます。いずれにいたしましても、近所に爆弾が落ちたと思って、外に出まして見ますと、大きな石塀が倒れておりました。まもなく雨が降ってまいりまして、浦上の方が真っ暗くなったので、「大学がやられたばい」ということで、身支度をして、友達と2人で、

大学に行くべく出発いたしました。駅の前まで来ますと、駅から先は猛烈な火災で一歩も進まれず、その日は、諦めて下宿へ帰りました。

その翌日でございます。浦上に入ることができましたが、今まで見慣れた浦上は、全く変貌いたしまして、瓦礫の山となっております。まだ燃えております。そして、途中の電車道には、電車の殻、殻っていうとおかしいですけど、土台は鉄でできておりまして、土台だけがあって、上は何にも無い、そういう状態でありました。やがて、大学の方に進んでまいりますと、当時、防火用水といいまして、人間1人が入るお風呂ぐらいのコンクリートの桶がたくさんありましたけれども、その中に人が入って、死んでおるのが見られました。全身真っ赤になって、よく見ると口から泡が出ております。しかし、本人は死んでおりました。そういう状況を見ました。爆心地から歩いて来る人達の姿を見ると、目はうつろになり、髪はボーボー、よく見ると、皮膚がですね、皮膚が簾のように裂けて下がっているという状況が見られました。そういうふうな、凄まじい地獄絵を見ながら、大学に近づいてまいりますと、1人、これは、どうしてあそこにあったのかよく分かりませんけれども、真っ黒になった黒焦げの死体が、転がっておりまして、その4本の手足の白い骨がのぞいておった、というのを見ました。そして、大学に近づきますと、坂のところに大きな馬が膨れ上がって死んでおりました。

大学の玄関口に近づきますと、たくさんの生き残った人達が、白衣とか看護衣とか着ながら、座っておったわけであります。その中で、私達の同級生の1年生は全部亡くなったんですけれども、まだ数人が生きておりました。彼らは、講義室から脱出してまいりまして、そして、病院の玄関口で座っておりました。私と牟田君と行って、彼らとお話して「自分達は助かった」というようなことを話してくれました。爆弾の様子も話してくれましたけれども、彼らもしかし、数週間の間に亡くなったわけであります。

そういうことで、大学病院の前を、人を助けながら来まして、今度はずっと裏山の方に穴弘法ってございますが、穴弘法につながる山の方に登って行きますと、これまた、たくさんの学生、医者、看護婦、たくさんの人たちが、脱出して登られて来たとみえて、白い服装の上に血痕とか泥とかが付いた状態で、みんな大体、座ったり寝たりして、それ以上動けない状態でありました。それで、牛乳瓶のかけらなどを差し出して「水をくれ」というようなことを言っておりました。私達はできる限りのことをしてあげましたけれども。要するに、それ以上は動けないでおるわけでございます。そして、何人か知っている学生を背にして、病院の所の下まで運んで、リヤカーを見つけてきて、そして原子野を突っ切って、その家まで連れて帰りました。しかし、せっかく連れて帰ったその友達の連中も、数日のうちに高熱、下痢、うわ言を発しながら、次々と死んでまいったのであります。

それから、2、3記憶に残った友人の話をいたしますと、友人の1人は、大学の構内に、基礎の方にですね、水溜りがございます。そこに、原爆の後、燃えている間、じっと浸かって火がおさまるのを待っとった、という友達がいまして、それが家に帰ってるというもんだから、訪ねてみました。やっぱりいろいろと話してくれましたけれども、彼も虚しく亡くなりました。

それから私達の同じ下宿に、一緒に食事に来ていた石橋君という人がございましたけれども、彼は柔道二段の猛者でございまして、非常に頑丈な体をしとったのであります。彼は、原爆後、教室を脱出いたしまして、そして途中で自転車を失敬して、それに乗って私達の下宿まで帰ってまいりました。私は、彼をちょうどその晩ですね、再空襲があるという空襲警報があったので、近くの今の経済学部ですか、その運動場のところまで連れて行って、一晩過ごした記憶がございます。彼は、翌日体力があったんでしょう。「自分の故郷に歩いて帰る」て言って帰りました。私の持っとった予備の上着を着せて、帰しましたけれども。彼も家には帰り着いたらしいけども、亡くなったそうでございます。

他に、川口君という友人がいましたけれども、これは佐世保中学で1年2年と一緒だったんですけれども、大学に入ったときに、また一緒になりました。非常に懐かしく思って交友をしておったんですけれども、彼も原爆のときに授業に出ておりまして、逃げ出したけれども、弱っているということを耳にしました。彼もとうとう駄目でした。

こういうことを申し上げたのは、秋月先生の話じゃないけれども、いわゆる中心点から一定の距離をおいた円内、いわゆる『死の同心円』の中の人の生命は、よっぽどの遮蔽とか、コンクリートの壁とか防空壕とかに入ってない限り、全部が死亡するということを申し上げたいのであります。これほどの恐ろしい爆弾をこの眼で見たわけであります。

それから私達は、医大の1年生でございましたから、診療の経験はございません。したがって、主な仕事は、大学に残っている生き残った人たちと、市内の家族との連絡をすることをいたしました。それをやったんですが、各小学校の講堂に、被爆者がどんどんどんどん運んで来られていっぱい、どこの小学校の講堂ももういっぱいで、お医者さんも看護婦さんも少なく、非常に困っている状態がよくわかりました。しかも、その患者の訴える症状は、本にも書いてないような、わからない症状でありまして、治療法も良く分からないという状況であったようでございます。詳しくは私も良く分かりませんけれども、そういう中で、次々と被爆者が倒れていったわけであります。ただ一つ申し上げたいのは、そういう場所へ数ヶ所参りましたけれども、一種共通した特有の臭いがあったんであります。あれは原爆の映画でも出てきておりません。なんかあれは、ほんとに印象に残っております。

私の経験は、1年生でございましたので、それほど多くはないんでございますけれども、そのようにして、全ての同級生、当時出席いたしました74名が、一人残らず亡くなったわけであります。先程のお話によりますと、大学全体では897人の犠牲者が出たと言う話でございます。要するに、この核兵器というものは、一方の名前では「人類絶滅装置」とも言われているぐらいです。おそらく全面、核戦争が起こったら、人類は滅亡する可能性があるということを言われておりますので、皆さんがこれをよく承知して、そして、核兵器の廃絶をみんなで推し進めていかなければならないかと思います。

あるいはまた、原爆の被害というものは、その時の被害のみならず、私共がずっと研究してまいりましたように、その後、被爆者の中から、被曝線量に比例して、多数の白血病患者が発生してまいりました。被害は広島の方がちょっとひどかったんですけれども、いずれにしても、長崎も広島も直線的な関係でもって、被爆者の白血病が増えておりますし、その他、各種の癌が有意の差を持って発生しておる。その主なものは、肺癌、乳癌、甲状腺癌、そういったものでございます。いずれにいたしましても、こういった我々の経験から、改めて核兵器廃絶の目標を達成するように努力しなければならないかと思います。

最後に、私、IPPNW（核戦争防止国際医師会議）の総会に毎年出ておりましたけれども、そのドイツでのスローガンを申し上げて終わりの言葉にいたしたいと思います。ドイツのケルンでありましたときに、スローガンは、"Gemeinsam leben, nicht gemeinsam sterben."「一緒に生きようじゃないないか、一緒に殺されるのは真っ平だ」とそういうふうな意味だと思います。どうもご静聴有り難うございました。

市丸道人（いちまるみちと）氏　プロフィル

1924年（大正13年）　12月26日生まれ　81歳　北海道出身

1950年（昭和25年）　長崎医科大学卒業
1965年（昭和40年）　長崎大学医学部助教授
（原爆後障害研究施設治療部門）
1972年（昭和47年）～1990年（平成2年）同　教授（同上）
1986年（昭和61年）～1990年（平成2年）
同　原爆後障害研究施設長（併任）
1978年（昭和53年）～1990年（平成2年）
同　附属病院輸血部長（併任）
現　　在　　長崎大学名誉教授
1991年（平成3年）　佐世保市立総合病院院長
1996年（平成8年）～現在
佐世保同仁会サンレモリハビリ病院院長

【社会活動】

厚生省原爆医療審議会専門委員
核戦争防止国際医師会議(IPPNW)国際評議委員

【受賞歴】

2003年（平成15年）　瑞宝中綬章叙勲
2005年（平成17年）　第6回永井隆平和記念・長崎賞
長崎新聞文化章

【出版物】

『内科セミナーBLD3』『白血病，疫学から治療まで』
『放射線と白血病』他多数
随筆『夾竹桃』『百日紅』